陸上競技研究紀要　第15巻

編集後記

本年度から編集委員長の重責を引き継ぎました．編集作業を経て，皆様に2019年度「陸上競技研究紀要」第15巻をお届けできることを光栄に存じます．本巻は，原著論文2篇，研究資料3篇を掲載し，科学委員会から「陸上競技の医科学サポート研究REPORT2019」に25篇，医事委員会から「エキサイティング　メディカルレポート」に8篇の報告をまとめていただいております．そして，特集「世界選手権ドーハ大会における競技パフォーマンス分析」には種目別に9篇を寄稿していただきました．世界選手権の競技パフォーマンス動向から東京五輪に向けての対策や戦略に役立つ情報となっています．

これまで日本陸上競技の普及と発展に科学が大きな役割を果たしてきたことは言うまでもありませんが，これらの知見（競技に関する科学的情報）やテクノロジー（用具やトレーニング開発など）が十分に共有され，新たな疑問を生み、深い議論が巻き起こっているかと言うと，そこまでではないように感じています。科学リテラシー（元は読み書きの意味から基本的な技能のこと，すなわち科学的情報を収集して、それを実戦に応用する力）の底上げが必要であると同時に，それは情報を発信する側にも求められています．とくに指導者（コーチ）として活躍される方には，情報を受け取るばかりでなく，積極的に情報を発信してもらいたいと思います．その場になるのがまさにこの陸上競技研究紀要です．

今回は，世界選手権ドーハ大会における競技パフォーマンス分析を特集テーマとして，各種目を専門とする先生方にまとめていただきました．国際競技会における競技パフォーマンスが高度化し，専門家と言えども雰囲気やイメージに惑わされ，パフォーマンスの特徴を捉え切れていない可能性があります．有名な話ですが，カールルイスが1991年世界選手権東京大会において世界記録で優勝したとき，後半にスピードが上がったように見えました．実際のレース分析結果からカールルイスもラスト20mは失速していたことが明らかとなりました．本特集から競技関係者の方々に役立つ情報として届けられることを期待するとともに，読者の方からも新たな気づきや批判をフィードバックしていただけるとうれしく思います．

国際的にみると，英語圏における情報や人の流通が国を超えて活発におこなわれ，その中から高いパフォーマンスが生み出されているように感じます．日本では日本語による交流と情報交換が主ですので，英語圏と比べると規模が小さいことは間違いありません．他の競技スポーツで日本の現状を変化させる大きなきっかけの1つに外国人コーチの存在や競技拠点を海外に移すケースが目につきます．国際的な競技の現状を把握しつつ，国内における競技関係者間で積極的に情報交換することが，現代の高度化された国際的な競技活動に不可欠な要素であると考えられます．陸上競技関係者の皆様にそのような場を提供すべくさらなる陸上競技研究紀要の充実を図りたいと思っています．

2020年3月

文責　榎本靖士

【陸上競技研究紀要第15巻　編集委員会】
榎本靖士（編集委員長），森丘保典（編集副委員長）
青木和浩，岡﨑和伸，木越清信，小林海，田内健二，松林武生，森健一，渡邊將司
【日本陸上競技連盟　事務局】
磯貝美奈子，河合江梨子，大野果穂，伊東愛美

www.toto-dream.com www.toto-growing.com ⓝ19歳未満の方の購入又は譲り受けは法律で禁じられています。払戻金も受け取れません。運営・販売：独立行政法人日本スポーツ振興センター

「陸上競技研究紀要」第 15 巻

2020 年 3 月 1 日発行
発行人　尾縣　貢
発行所　公益財団法人日本陸上競技連盟
〒 160-0013　東京都新宿区霞ヶ丘町 4-2
JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 9 階
TEL：050-1746-8410

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

JAAF

LIVE ATHLETIC

よりアスレティックでいよう
ライブのアスレティックを体験しよう

写真提供：フォート・キシモト